様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23　年　4　月　8　日現在

機関番号：62501
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：20520720

研究課題名（和文）

高齢化社会における老年世代の生きがいと技能の継承をめぐる民俗学的研究

研究課題名（英文）Ethnological research into the transmission of skills and elders' sense of purpose and value in life within the aging society

研究代表者：関沢　まゆみ（SEKIZAWA Mayumi）
国立歴史民俗博物館・研究部・准教授
研究者番号：00311134

研究成果の概要（和文）：
本研究課題について、近畿、東海、北陸、関東、東北地方の高齢者を対象に聞き取りを中心とする調査を行ってきた。そのなかで、(1) 一定の時代を生きた「世代」ごとに、表現する生きがいや価値観、身につけた多様な技能があること、(2) 高度経済成長期の青壮年世代が老年世代となった現在、特に農村においては地域社会のつき合いの断絶や家族の介護力の低下など深刻な問題に直面していること、などの実態が具体例をもって明らかにできた。

研究成果の概要（英文）：
Survey interviews on this topic were conducted with elderly people in the Kinki, Tôkai, Hokuriku, Kantô, and Tôhoku regions of Japan. Specific examples clearly demonstrated that (1) each generation, through its lived experience of a certain era, expressed different values and reasons for living, and possessed a varied range of skills, and (2) people of the generation that came of age in Japan's era of high economic growth and are now becoming elderly, particularly in rural areas, are confronted with serious problems involving the collapse of social relations within regional society and the declining ability of families to provide care for the elderly.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	600,000	180,000	780,000
２００９年度	500,000	150,000	650,000
２０１０年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学
キーワード：民俗学

１．研究開始当初の背景

現在、日本の人口は急速に高齢化が進行して

おり、2025 年までには総人口に占める 65 歳以上の割合は 29%に達すると予測されている(国立社会保障･人口問題研究所 2002 年)。また、2007 年以降、1947 年から 49 年に生まれた約 700 万人のいわゆる団塊の世代が定年退職の年を迎えている。この世代の引退の影響を受ける企業側では引退技術者の活用などが課題の一つとなっている。また、会社から地域へ場を移してボランティア活動を行う定年退職者像や彼らが新しい文化を創り出していくアクティブな高齢者像が注目されている。しかし、これまでの申請者の研究（「高齢化社会における隠居と定年をめぐる民俗学的研究」科研（基盤）(C)2003－05 年）からは、定年には 60 歳代の会社の定年退職をさすいわゆる「社会的定年」と、70 歳代後半から 80 歳代の健康の喪失や身体的衰退による「身体的定年」とも呼ぶべき 2 段階があることがわかってきている。そして、社会的定年に関しては、主に定年後の生活の充実、とくに労働や社会との関わりと生きがいについて論じられ、一方の自然的定年、身体的定年に関しては主に介護の問題が論じられてきているのが現状である。

75 歳を境とする前期高齢者と後期高齢者という単純な二区分ではなく、社会的定年と身体的定年との区別という新たな把握により A：社会的定年前後、B：社会的定年から身体的定年までの間、C：身体的定年前後、の三つの時期を設定して、それぞれの時期に個々人が何を行おうとしているのか、具体的な高齢者の生活をめぐる諸問題の調査と分析を試みるものである。

本研究は、申請者のこれまでの研究をさらに深化させ、新たな視点の開拓をめざすもので、本研究が目的とする社会的定年前後から身体的定年前後までを視野に入れた研究はまだ十分ではない。社会的定年については人口変化と労働力の問題として、経済学や社会学の分野で研究がなされ、自然的・身体的定年については介護の問題として、社会学や社会福祉学、看護学などの分野で研究がなされているが、両者は別々の取り組みのままである。

現代の日本社会では少子高齢化が進行し、65 歳以上のいわゆる非労働力人口が現在の 48.0%から 2015 年には 50.6%となり、2030 年には 52.4%になると予測されている。経済学の分野では、人口減少、少子高齢化など、人口構造の急激な変化に対応する雇用戦略として、リタイアメントの再検討、エイジレス雇用の実現、引退技術者の活用、などが検討されている（ドイツ－日本研究所・ミュンヘン大学日本センター・東京大学大学院工学系研究科他「人口の高齢化に対応した人的資源マネジメントと労働政策－日独比較－」国際会議　2005 年 10 月)。そして、人口減少、少子高齢化、団塊の世代の大量定年など、労働現場における人的資源の不足の現状に対しては、定年後も仕事を続けたいという本人の希望にも合致しているとみている。定年は一種の年齢差別であり、たとえば玄幡真美『仕事における年齢差別－アメリカの経験から学ぶ－』(御茶ノ水書房　2005 年）や、清家篤『定年破壊』(講談社　2000 年）などは「生涯現役社会」を提唱している。しかし、定年退職者の問題は単に経済的観点からの労働資源としての問題だけでなく、社会的には世代間における技術や技能の伝承や伝達、また個人的には本人の老いの生きがいや生活の充実など、そのような観点からの研究が必要である（関沢まゆみ『隠居と定年－老いの民俗学的考察－』臨川書店　2003 年、青柳まちこ編『老いの人類学』世界思想社　2004 年など)。

さらに、先進国のなかでも最も高齢化が進

行したといわれる日本社会に対しては、すでに外国人の文化人類学者や社会学者たちによる調査研究も進められており、日本の都市および農山漁村における高齢者の生きがいについての調査分析や、老人介護の主体が家から社会へと変化している実態についての調査分析が進められている。そして、日本のケースと欧米諸国のケースとの比較研究も増えてきている（“The Practice of Concern;Ritual,Well-Being and Aging in Rural Japan”Irmela Hijiya- Kirschnereit, Hijiya-Kirschnereit,Carolina Academic Press,2003, “Aging and Social Policy;A German-Japanese Comparison”Harald Conrad/Ralph Lutzeler(eds.) INDICIUM, 2002 など)。これらいわば「外からの眼」による指摘を刺激としながらも、一定の日本社会の歴史的深度への視点と分析力をもつ日本民俗学からの独自の研究が必要と考える。

以上、社会的定年と自然的・身体的定年という二つの画期を設定しつつ、同時にそれらを同じ加齢と老いの境涯として包括的にとらえなおす新しい視点に立つことによって、本研究は、従来のように働くこととケアされることを別枠のものととらえる研究のあり方とは異なる、新しい老年世代の老いの過程に内在する可能性についての分析を日本の民俗学の立場から試みることを目的とした。

２．研究の目的

この研究によって明らかにしようとした課題は、第一に、企業や農村・漁村における現役引退を前にした高齢者から次世代への技術・技能の継承についての具体的な事例分析（会社生活で培った技術・技能、村落生活における漁業や神社祭祀における技術・技能、家庭生活における衣食住に関する技能など)、第二に、社会的定年後の加齢にともなう生活変化とそれに対応する新たな生活の充実への努力や実践についての具体的な事例分析、第三に、一定程度の介護を必要とする自然的・身体的定年後の生活の場の選択に関する具体的な事例分析である。

３．研究の方法

これらの課題について、いずれも聞き取り調査による事例収集とその分析を中心とした。調査地の選定については、申請者が 1980 年代後半以降、調査を継続している村落を主な対象とした。地域的には、近畿（滋賀県、奈良県、京都市、神戸市、他)、東海（三重県鳥羽市)、北陸（富山県砺波市)、関東（栃木県、神奈川県、他)、東北地方（岩手県、秋田県）などと、地域差を考慮してフィールド選定を行なった。また、伝承の時間軸としては、1950 年代半ばから 70 年代初めにかけての高度経済成長期とその前後における変化について特に注意することとした。

４．研究成果

(1) 典型的な島嶼部村落といえる三重県鳥羽市神島における生活変化と老年世代の役割についての調査を行なった。神島は、2008 年現在高齢化率 40%で高齢化が進行している島である。50 年前の『専修大学地理学研究会紀要』5（専修大学地理学研究会　1958 年）に報告されている昭和 33 年当時の神島の生活と高度経済成長後の神島の生活との比較を行ない、漁港の整備と連絡船の運航や電気・水道・ガスの普及、などによって日常生活が便利になった一方、若年世代の島外流出などの問題をかかえながら、1960 年代、70 年代を経て島の生活が大きく変わったこと、しかし、その一方で、宮持や

隠居衆と呼ばれる島の神社祭祀などを行なう長老衆の組織やその役割は維持、継承されていることなどが確認された。高度経済成長は、日本各地の農山漁村の過疎化と都市の過密化をもたらしたが、この神島のように一定の伝統行事を伝えてきた地域社会の場合には、その伝統行事が地域社会を守り、また地域社会が伝統行事を守る、というような両者の双補的な関係性を指摘できる事例が少なくないといえる。

(2) 典型的な中山間地農村といえる栃木県芳賀郡市貝町の専業農家への 1960 年代以降の農業の変化についての調査を重点的に行なった。そのなかで、この市貝町では北部から南部にかけて現在大規模圃場整備事業が行なわれており、その完工に向けては換地等々の困難な問題を抱えている。現在 70 歳代の世代が交渉にあたり利害の調整役となっている。その土地の交渉の仕方には、この農業に従事してきた 70 歳代の人物ならではの老練の技術があることが注目された。このことは交渉の方法にも世代による相違があることを示唆していると思われ、老年世代の技能の一つとしてさらに調査と分析を継続していく予定である。

(3) 1980 年代以降、研究代表者が民俗誌的調査を継続的に行なってきた近畿地方の宮座の存在する村落における 2000 年以降の実態についてあらためて再調査を行なった。宮座は、村落における長老たちが氏神の神社をまつる組織であり、長老たちの社会的役割とそれを果たす責任感が長老たちの生きがいとなっている点が注目されるが、世代交代をへるなかでこの現在においても 1980 年代のころと変わらず長老組織を維持している村落が少なくないことが確認された。ただし、儀礼内容や執行日時、また衣裳や道具などに改変や簡略化がすすめられている事例も少なくない。伝統を維持し継承しようとする高齢者の世代と、それに対する負担感の大きな若者世代と、またその中間世代と、これら 3 つの世代間の、村落における対立、対話、妥協、協調という関係性について、伝承の維持と改変や簡略化の動態論的な分析が今後の大きな課題となった。とくに、大和高原地域の村落においては、時期的には 2006～08 年ころに大きく変化したことが確認されたが、その背景についても今後さらに調査、分析を行なう。

(4) 神戸市内在住の高齢者女性の場合について、家族構成の変化と本人の加齢とともにその日常生活や友人との交流がどのように変化してきているか、について聞き取り調査を継続した。加齢にともない、仕事（夫と子供のための家事労働から夫のための家事労働、夫と死別後は自分と家屋の維持のための家事労働など）と趣味（70 歳代半ばでそれまでの刺繍や編物や旅行をやめて、読書やラジオ視聴などへ変化、園芸も規模を縮小など）の両方が変化していくケースが注目された。年齢とともに次々と選択を続けていくその柔軟な生き方が高齢者の生きがいの見出し方の上で有効であることを示す事例が多い。

(5) 家族の介護力の低下が指摘されているが、高齢者の医療に直接関与している医師たちがその問題に積極的に関わっている事例の調査を開始した。一つは、先の中山間地農村の栃木県芳賀郡市貝町の事例である。市貝町北部の続谷地区で昭和昭和 47 年（1972）から

父親の跡をついで往診を行なうなかで、家族が勤めに出た後、一人ハナレで寝ている（枕元にはおにぎり一つとお茶が置かれているだけ）高齢者を目の当たりにして、何とかしなければという思いから、特別養護老人ホーム杉の樹園（平成 3 年竣工）を建設するにいたった故倉持玄白医師（昭和 10 年生まれ）についての、当時、立ち上げに協力した仲間たちや跡を継いでいる息子夫婦への聞き取りを行なった。市貝町北部や茂木町の山間部では、昭和 40 年代半ば以降、息子夫婦が会社や工場に働きに出る家が増えてきていたため、このように昼間、老親が一人残されている家は少なくなかった。そこで、僻地医療や往診で地域の事情をよく知っている医師が、介護の場を、家庭から施設へと移そうとしたのである。しかし、2010 年の聞き取りでは、まだまだ同じ町内の施設に親を入れることへの抵抗感が強いことも明らかになった。家族の介護力の低下という現実と介護や家族（特に嫁）がするものという意識とのズレが注目された。

(6) この問題についての、もう一つの事例は、2010 年 4 月に富山県砺波市にオープンしたナラティブホームの事例である。佐藤伸彦医師が「家庭のような病院を」という理念のもと、家で過ごすように自由で、しかも診療が行なわれるから安心な末期高齢者のための施設である。しかも、ナラティブノートが患者一人ひとりに用意され、職員たちが、患者との会話や患者の様子について、メモをとりためていく。佐藤医師はナラティブを「患者の生活史」と位置付け重要視している。実際に、そのノートを読むと、生と死とのぎりぎりのところにいる患者たちが、語ることで自己表現し、生きた証を残しているようである。この事例からは、生と死と語りの問題をあらためて考えさせられる。

今後の課題

第一に、生活現場の観察と対話と聞き取りを主要な情報資料収集の方法とする民俗学の立場から、定年後の人生を加齢と年齢基準に基づきながらも総合的にとらえる視点に立ち、50 歳代後半から 60 歳代、70 歳代、80 歳代、90 歳代の男女それぞれ個人と家族、地域社会、友人などの関わりの変化の追跡を、各地で行なうことによって、老人の肉体的衰退という現実のなかでいかに精神的充実をはかる努力がなされているのかについて、歴史性と地域性の両面を視野に入れた分析を年代別に注目しさらに深化させていく。第二に、本研究では自然的・身体的定年という視点を用いることによって、老人介護の問題も積極的に射程に入れる。これまで社会福祉学や看護学、社会学などの分野での研究が多くなされてきたが、介護の場が家族から社会へという変化が実際に日本列島各地においてそれぞれどのような要因によって起こっているのか、またそれに伴って地域の人々の老いと死に対する意識が伝統的なそれと比較してどのように変化してきているのか、とくに民俗学の視点からの調査分析を試みたい。それは歴史的変化と地域差とを併せ追跡する視点である。それによって得られる知見は、地域ごとの過去の慣習をふまえた上での近未来へ向けての一定の知の還元として意義をもつものと考える。第三に、本研究期間中に得られた資料と調査ノートなどの一部を資料集成として『高齢化社会におけ

る老年世代の生きがいと技能の継承をめぐる民俗学的研究　資料集』（平成 23 年 3 月刊行）として簡易製本しておいたが、今後その分析を進めて、民俗学の視点からの高齢化社会へ向けての具体的で効果的な提言を見出すことが一つの重要な課題である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 2 件）

①関沢まゆみ「老いの民俗と日本社会―制度としての老いと個人の老い―」韓国文化遺産研究所　2010 年 12 月 3 日（於：韓国中央大学校）

②関沢まゆみ「高度経済成長と地域社会」ポーランド国立科学アカデミー・民族学科学コミッティー　2010 年 10 月 22 日（於：国立アダム・ミツキェヴィチ大学）

〔図書〕（計 3 件）

①関沢まゆみ「高度経済成長と地域社会」国立歴史民俗博物館編『高度経済成長と生活革命―民俗学と経済史学との対話から―』吉川弘文館　2010、41―70

②関沢まゆみ編『戦争記憶論―忘却、変容そして継承―』昭和堂　2010、280

③関沢まゆみ「大人と老人の民俗」飯島吉晴、宮前耕史、関沢まゆみ（共著）『日本の民俗 8 成長と人生』吉川弘文館 2009、197―290

６．研究組織

(1)研究代表者

関沢　まゆみ（SEKIZAWA Mayumi）

国立歴史民俗博物館・研究部・准教授

研究者番号：00311134

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：